慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランソア・ケネーの経済論
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.1 (1917. 1) ,p.122- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170107-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

も出來れば、隨つて又之を支配す可きである』。

此の如くして以上の二個の思潮は相合して一つになつた。若し強い人が支配し得るならば、強い國家も亦支配し得る。フィフテは獨逸人に向つて彼等が選民であることを說いたのであるが、久しく閑却せられて居た此思想はゴビノーの著書や其後のヲルトマンやチャムバレーンの唱說に依つて勢を得て、遂に獨逸人は正直に彼等が選ばれた人民であつて、獨逸は世界を支配する運命を有つた而して爾かするの實力ある超國家であるとの信念を懷くに至つたのである。『ド・スタエル夫人曰く、「他の國民は沈思に依つて靜肅になるけれども、獨逸人は却つて熱狂する」と。此くの如くして獨逸人は戰爭の準備をしたのである』。然し著者は必ずしも今回の大戰破裂を以て、專ら哲學者や夢想家の敎訓に歸しやうとする者ではない。

フランソア・ケネーの經濟論

高橋誠一郎

一

Roscher、Ingram 其他の經濟學史家の謂へるが如く、第十八世紀の前過半は經濟思想界に於ける停滯不振の時代なり。殊に凄慘たる色彩を以て路易十四世末年の佛國經濟狀態を描出せる Pierre le Pesant de Boisguillebert が其著の出版に累せられて Auvergne に流謫せられ、堡砦を圍む五十、瘡痍を被る八十の老將軍 Sebastian le Prestre Vauban が同じく其著書の爲めに國王の寵を失し後幾週ならずして沒してより佛國經濟思想界は徒らに沈默の年を迎へて復之を送れり。其間僅に Lauriston の John Law と因緣深き Compagine des Indes の出納方たりし

Dutot の Réflexions Politiques sur les Finances et le Commerce の兩卷（一千七百十八年並に三十八年版、同四十三年並に五十四年再刻）並に Law の秘書たりし Jean François Melon の Essai politique sur le Commerce（一千七百三十四年、三十六年、四十二年、並に六十一年の各版あり、初版は檢査官より頒布禁止の命を受く。然れども此書に Ingram の記すが如く一千七百三十一年版あるを聞かず。同氏の揭げたる此書の表題にも誤謬あるが如し、且つ著書の姓氏は彼の記するが如くメロン Mélon に非ずしてムロン Melon なるに似たり）の如き Oncken の所謂 Reform-Merkantilisten の著作ありて其空虛を滿すのみ。

斯くの如く經濟問題を主題とせる著書が多く其筋の忌憚に觸れて不幸の結果を見たるのみならず、言論嵌制の手は Abbé Alary の Club de l'Entresol にも及べり。此小倶樂部は一千七百二十四年の創設にして Bolingbroke, Abbé de Saint-Pierre 並に Marquis d'Argenson を部員とし、首として經濟問題を討議するの目的を以て Place Vendôme なる Abbé Alary の部屋に集會しつゝありしものなり。然れども饒舌家 Abbé de Pomponne の爲めに累を爲して Cardinal de Fleury 其時局を討議するを喜ばざりしが爲め終に一千七百三十一年を以て閉鎖せられたり。而して之が部員にして、路易十四世に Grand の稱號を與ふるを拒みたるが爲めに一千六百九十五年以來會員たりし佛國翰林院より逐はれたる彼れ Charles Irénée Castel Saint-Pierre は其有力なる筆を種々なる計畫に移し、綴方改正より七葉樹の利用に、國勢調査の利益より鑄貨改惡の弊害に移り而して世界的平和の黃金世界を將來に夢想するに至りぬ。同じく之が部員たりし Réné Louis de Voyer de Paulmy Argenson が Considérations sur le gouvernement

ancien et présent de la France は筐底深く潛みて出でざること三十有餘年、漸く一千七百六十四年に至りて上梓せらる。然れども此年に發行せられたるものは頗る缺點多きものにして後の一千七百八十四年版と雖も、尙ほ不完全なるを免れず。此書に著者自ら與へたる表題は Jusques où la démocratie peut-être admise dans le gouvernement なりと云ふ。彼の著書は次第に國人の眼より遠かりて纔に其有名なる格言 Pas trop gouverner によりて記憶せらるゝのみ。（Oncken は其 Die Maxime Laissez Faire et Laissez passer, ihr Ursprung, ihr Werden. Ein Beitrag zur Geschichte der Freihandelslehre に於て Laissez Faire なる格言の上句を彼に歸せり）。

「遮莫窮迫に窮迫を重ね來りたる佛國當時の社會狀態は政策の上に於ても思想の上に於ても長く彌縫補綴の時代の繼續を許さず。刻下の窮狀を脫し得可き唯一の道は根本的改革に依るの外なしとの意見は益々緊切に時人の心胸に迫り來れり。沈默は到底維持し得可くもあらず。嵐の前の平靜は破れんとす。一千七百四十八年を以て Montesquieu の De l'Esprit des Lois は世に出でたり。Voltaire, Rousseau は其筆を磨けり。然り而して記憶す可き一千七百五十一年は來れり。Secte des économistes の創設者たる我が François Quesnay が國王の一等侍醫の職を購ひて Versailles 宮殿の entresol に幾多の哲學者を會するの端を發きしは此年なり。（國王の寵姫 Madame de Pompadour に侍へたるは是より前一千七百四十九年なり）。Jean Claude Marie Vincent de Gournay が商務監の一人に任命せられたるも此年なり。Denis Diderot 及び D'Alembert の Encyclopédie が着手せられたるも此年なり。全然思想の傾向を異にせる多數の寄稿家（殊に經濟學の方面に於ては François Véron de Forbonnais の如き Mercantilism の色彩最も濃厚なる者は Quesnay, Morellet, St. Lambert, Leroy 等と相並べり。吳越合舟の觀を免れず）の手に成れる協同の勞作は固より根本的の統合を期待す可くもあらず、纔に外觀的の結合を見たるに過ぎずと雖も、然も當時に於ける最も雄大なる事業たりしことを失はず。

「斯かる間に於て對岸なる英國民の經濟思想は次第に是國に輸入せられたり。思想の潮は一葦の海峽を隔てたる是等兩國の間に常に淘去し復た淘來して止むことなし。Law の畫策中聰明なる行動に由りて鉅萬の富を作せる愛蘭土出身の巴里 Rue de l'arbre の銀行家 Richard Cantillon が自ら佛國の友人の爲めに反譯したる Essay upon the Nature of Commerce in General の部分は久しく寫本として傳へられたるが Essai sur la nature du commerce en général の題下に此時代に當り三度刊行せられたり。Gournay は其注意を英國經濟學者に傾け Sir Josiah Child の Brief Observations concerning Trade and the Interest of Money 並に其附錄として重刻せられたる Sir Thomas Culpeper の A Tract against the high rate of Usurie を反譯して一千七百五十四年巴里に於て梓に上せ、更に大 Turgot の心的活動を同一の方面に導き、之を說きて Josiah Tucker の著 Reflections on the Expediency of a Law for the Naturalisation of Foreign Protestants (Questions importantes sur le Commerce à l'occasion des oppositions au dernier Bill de Naturalisation.)（一千七百五十一——二年）を反譯せしめたり。David Hume の Political Discourses も亦一千七百五十六年を以て佛譯せられたり。

而して佛國最初の穀物自由交易論として傳へらるゝ Claude Dupin の Oeconomiques 三卷は匿名を以て、然も其筋の眼を避くるの目的を以て Carlsruhe を出版地として現れたり。（然も尙

は細心なる著者は出版後、自ら其版本の回收に努めたるを以て今僅に世上三部を殘すのみなりと云ふ)。次で其一章を拔萃して Mémoire sur les Bleds の名の下に一千七百四十五年之を出版し、更に六十年二月及び三月に亘りて Journal Economique に掲載せり。Claude Jacques Herbert 亦倫敦(一千七百五十四年)並に伯林(一千七百五十五年)に於て Essai sur la police des grains を出版して自由貿易に贊する議論を爲せり。

斯くの如き時代に於て「歐洲の孔子」「現代のソクラテス」「近世のモーゼ」と呼ばるゝに至りし猿面短身(Madame du Hausset の言)の醫官我が François Quesnay は毎週 Versailles の中二階なる其居室に Diderot, D'Alembert, Duclos, Helvetius, Marmontel, Buffon 並に老 Mirabeau を首とせる幾多の Economistes と議論を交換しつゝ靜かに經濟上の思索に耽りつゝありしなり。

II

Quesnay が述作の歷史は醫術上の研究に始まる。即ち彼が最初の著書は一千七百三十年に出版せられたる Observations sur les effets de la saignée なり。此書は當時醫學界の最大權威たりし外科醫 Silva の出血に關する論文の誤謬を指摘して餘蘊なきを得たるものにして、彼は是が爲めに La Peyronie の知遇を蒙り、彼が一千七百三十一年巴里に創設せる Académie de Chirurgie の書記官に選拔せらるゝことゝ爲れり。

一千七百三十六年 Essay physique sur l'economie animale の初版を出す。實に生理學の哲學的基礎を述べたるものにして、次で一千七百四十七年之を增補して三卷と爲し以て第二版を上梓せり。彼は此版に於て精緻なる靈魂の研究に入り、人體生理の上に心理學を建設せんと努力せり。而して彼は結論として自然の權利として自由を主張すると共に又人類の社會性を說き、以て其後年の經濟學說の根柢を爲すに至れる社會哲學を玆に概言せり。次で一千七百四十九年には Traité de la suppuration 並に Traité de la gangrène 而して一千七百五十三年には Traité des fièvres continues を出版せり。

Diderot の Encyclopédie は初めて此老醫をして經濟問題に其筆を染むるの機會を與へたり。彼は一千七百五十六年匿名を以て同書に Evidence なる形而上學上の一項を公にせるが、同年更に Fermiers を、翌五十七年には Grains を寄することゝ爲れり。兩稿倶に其子(Quesnay le fils)の署名に隱れたり。(彼の長子名を Blaise-Guillaume と稱す。父は彼の爲めに一千七百五十五年今の Departement de la Nièvre なる Nivernais に廣大なる土地を購入せり。そは實に Beauvoir, St. Germain, Beaurepaire の諸領地に跨れり。以て彼の富を致せることの大なりしと農事經營に熱心なりしとを知る可し)。蓋し彼が侍醫としての地位は彼をして公然政治問題を論述するを避けしめたるものなる可く、彼は其生涯を通じて經濟上の意見を發表するに際しては常に匿名若しくは假名(時には其學徒の姓名を用ゐたり)を以てするに至れり。

「小作人」の一項は先づ精細なる智識を以て耕作用に馬若しくは牛を使用するの直接間接の利害を比較考量し petite culture に對して馬の使用即ち grande culture の利益を主張せり。彼の認むる所に據れば農民の大多數は貧困にして馬を使用するに堪へず、而して其結果は甚大なる國民的富の損失と爲るなり。農民の慘憺たる窮狀は主として左の三原因に因由す。即ち第一に困窮並に直接稅 taille 及び兵役 milice (間もなく彼は之に corvée 即ち例へば道路修築の際に於けるが如く無償を以て勞働又は勤務を國家の

爲めに提供するを強制せらるゝ農民の義務を加ふるに至れり）を憂ひて百姓の子孫が其親の有する小資本の幾分を携へて大都會に移住し農村を棄背すること、次に農業上の投資者よりして其資產の安固を剝奪する專擅なる課稅、第三には穀物の取引を妨害する諸制限是なり。彼は農民の子弟は其兵役の義務を回避するが爲めに都會の生活を選ぶに至らしむ可きが故に之を民兵より除外するの徒爲ならざる可きを云々せり。彼は赤貧を以て地方の產業に取りて必要なる刺戟なりと爲すの見解を嘲笑し、希望は絕望よりも良好なる刺戟なり、而して活動は成功に比例するものなりと說けり。彼は國內の農事統計を研究し、是に據りて耕作地及び牧場の面積、家畜、人口、穀物の生產及び消費、價格の段階、生產の費用及び利潤を考査せり。農業は國家の基礎を形成する生產にして自由と安固とは其主として要望する所のものなり。穀物の自由交易、輸出の許可更に進みては英國に於けるが如く之を奬勵するの態度に出づる時は年々價格の上に生ずる變動を減殺すること大なる可く、而して農民の繁榮に資する所些少ならざる可く、是に由りて又次第に他の方面の繁榮を誘致す可く、以て更に發達せる更に有利なる農業耕作を行ふの結果を來し、國民的並に個人的富を增加し、更に大に更に健全なる人口を齎し、而して國庫は一層充實するに至る可し。彼は改革の第一步として先づ專擅なる taille を廢止せざる可らざるを主張するも彼自ら告白するが如く彼は當時に於ては未だ一定の公正にして且つ簡單なる原則の下に課稅を行ふ可き方法を會得するに至らず、彼が後年の impôt unique の主張は未だ本問題の完全なる解決法として案出せらるゝことなかりしなり。彼は個人の申告を以て査定の最良の基礎たる可きものたることを指示せり、是恐らくは Abbé de Saint-Pierre が taille tarifée の計畫に從へるものなる可きか。彼が此項中に引用せる著書の名は唯だ John Locke と農學上の權威として Dupré de Saint Maur とあるのみ。

「穀物」の一項は前者よりも一層注意の價値あるものなり。凡庸なる後繼者に由りて一層其短所を暴露したる Colbert 主義の餘弊は當時の佛國に於て最も甚しきものありき。久しく政府の政策は製造業特に絹布の如き奢侈品の製造を奬勵して全く農業の荒廢を顧みざりき。人民は葡萄の培養を禁止せられ一般に桑樹を植ゆることを奬勵せられたり。然れども Quesnay の意見に從へば眞の國民的經濟政策は佛國々土の大生產力を利用するにあり。而して當時企圖せらるゝ所とは正反對に奢侈品を國外より購入するにあり。國家は穀物の豐饒なる收穫並に國內及び國際間に於ける穀物の自由交易に依りて隆盛を極むるに至る可きなり。彼の計算に據れば國內に於ける實際の穀物生產高は一ヶ年凡そ五億九千五百萬リーヴルに相當す。然るに今到る所に馬を使用して適當なる耕作を行はゞ收穫は十八億千五百萬リーヴル即ち約三倍以上に增加す可し。而して是より總ての生產費を控除したる後の餘剩は從前の一億七千八百萬に對し八億八千五百萬と爲り約五倍の額に達す可し。農業と商業とは佛國々富の二根源なりと思料せらるゝも然も彼の意見に從へば斯般の區別は畢竟單なる空論に過ぎず、何となれは商業及び工業は農業の分枝に過ぎず、農業は實に商工業に取りて根本的にして且つ缺く可らざる源泉なり。而して彼は此兩者の中、工業を以て商業よりも遙に重要なるものと做せり。斯くて嘗て Henri 四世に對つて農耕及び牧畜は佛蘭西に對して營養を供給する二個の乳房なり。Labourage et pastuage sont les deux mamelles de l'état. と主張せる Duc de Sully の政策並に Richard Cantillon

が表明せる「根本的諸眞理」を稱揚し、以て葡萄栽培及び葡萄酒業に加へられたる障害を遺憾とせり。有福なる農民の手に其最高の價値を有するに至らしめたる大農圃は實に國家の繁榮及び大人口の眞の基礎を成すものなり。彼の所謂有福なる農民とは自ら土地を耕作する勞働者を云ふにあらずして自己の智識と自己の富とを以て其事業を支配し指揮する entrepreneur を指すものなり。由來此術語は J. B. Say の初めて使用したるものなりと信ぜられし所のものなるも彼が遙に是よりも以前に之を使用したると注意す可き點なり。大人口の利益を以て單に大軍隊を補給するの手段なりと思惟するものは眞に國家の力を判定し得たるものにあらず。武人は啻に人間を以て兵卒たり得可きものと看做すに過ぎずと雖も、然も眞の政治家は戰爭の爲めに豫定せられたる人間の存在を憾むこと、恰も地主が其農圃を保存するが爲めに設けたる壕溝中に費されたる土地を悔むが如し。大軍隊は國家を空虛ならしむるものなり。然るに大なる人口と大なる富とは國家をして畏敬す可きものたらしむ。人間の勞力なくんば土地は何等の價値なきものなり。人間、土地及び家畜は強大なる國家を形成す可き原始本然の富なりと。彼は是に至つて taille が農民の地代に基礎を置く可きことを指示し、以て農民の生産資料に課稅することなからしめ、而して其耕圃に對して支拂ふ可き地代を打算するに當り taille をも計算中に入ることを得せしめんとせり。斯くの如き理想は當時の社會狀態に在りては之を實現すること容易にあらず、而して這般の理由に基きて彼は前項 Fermiers 中に於ては別箇の案を提言したりと雖も、然も彼の新理想は直に之を借地農民に適用し得可く、又多少の困難を忍ばゞ之を分益農民にも及ぼすこと不可能にあらず。彼は專擅なる課稅を以て其國民を服從せしむ可き最も確實なる方法なりと看做す愚策を以て政府の意見に出でたるものと做すを喜ばず。斯かる不條理なる行爲は其如何に非議す可く且つ嗤笑す可きものなる可きかを熟知せる大爲政家の考慮す可き所にあらず。（彼は此點に關し Remarques sur les avantages et les désavantages de la France et de la Grande Bretagne par rapport au Commerce et aux autres Sources de la Puissance des Etats. Traduit de l'Anglois du Chevalier John Nickolls.（一千七百五十四年）を引用せり。著者は此書が Tucker の一千七百五十年の著 Brief Essay on Trade に負へることを認めたり。Quesnay が本項を草するに至り常に其心裡を離れざりしものにして、飜譯の風を裝ひたる此書の眞著書は Marquis de Plumart Dangeul にして此書は其巴里及び Leyden にて出版せられて後英文にものせられ一千七百五十四年倫敦に出版せられたり。（例の Eugène Daire は其編纂せる Les Physiocrates に於て非常なる誤謬に陷り此書を以て Thomas Mun の著なりと做し其年代を一千七百年となせり）。）taillables は孰れも皆頗る小額の資産を有するに過ぎざる人々にして之を屈從せしむるよりも寧ろ鼓舞するを要するものなればなり。Remarques の著者は英國の賢明なる政策と富裕とを以て佛國の愚蒙なる政策と貧窮に比較し、英國は其隣邦を怖る可き何等の理由なしと論結せり。然も Quesnay 曰く吾人をして自由貿易を採用せしめよ、然らば吾人は彼等の如く富裕たるに至る可しと。洵に佛國は亞米利加新大陸の豐沃なる土地によりて脅さるゝが如き觀あるも、然も彼等の競爭は多く恐るゝに足らず。即ち彼等の穀物はさまで上等品にあちず、且つ長時に亘る航海中に其品質を損ずるのみならず、彼等は驕て其人口の增大に伴れて彼等自身の穀物を要するに至る可し。吾が國產の穀物は彼よりも良き麵麭を製造し而して好く

之を保存せしむることを得可しと。是に至つて彼は穀物貿易の利益を製造品貿易の利益と比較するの擧に出で、斯くて經濟行政の十四法則を規定せり。第一、農業に反して工業上に費されたる勞力 les travaux d'industrie は富を增加することなし。第二、遮莫そは人口並に富の增加に資することある可し。第三、然れども是が爲めに多數の人間を茲に誘致して農業に危害を加ふるが如きことあらば却つて反對の結果を見るに至る可し。第四、農業家の富は農業上の富を產む。第五、工業上の勞働は土地より生ずる收入を增加するの結果を來し、而して是に由りて再び工業を支持するなり。第六、其原始生產物に於て大取引を有する國民は常に製造品に於ても亦比較的大なる取引を維持し得るなり。第七、然も若し殆ど全く原始生產物の取引を有せずして唯だ單に製造品の取引のみに依りて立國の根源を成すに至らば、其國は最も危險にして且つ不安定なる狀態に在るものと謂つ可し。第八、製造品の國內に於ける大取引は獨り土地よりの收入に依りて維持せらる可きのみ。第九、廣大なる領域を有しながら其製造工業を尊重するが爲めに自國の原始生產物を輕視する國民はあらゆる方面に於て自己を破壞しつゝあるものなり。第十、外國貿易の利益は貨幣を增加するの點に存するものにあらず。第十一、貿易の差額は各國民が其貿易より受くる利益又は富の狀態を標示するものにあらず。第十二、各國民々福の狀態は國內及び國際貿易の兩者、而して殊に前者に據りて判斷す可きものなり。第十三、自國の土地、人民及び其航海業より最上可能の結果を抽出する國民は其隣邦の商業を嫉視するの要なし。第十四、相互の取引に於て最も有用なるか若しくは必須なる貨物を賣却する國民は贅澤品を賣却するものに對して利益を有す云々と。最後に彼は國家をして繁榮ならしむるが爲めに政府の採る可き手段を總括して財の生產及び循環の自由、通行稅の廢止若しくは削減、同一性質の義務に對する地方的又は人格的特權の滅絕、道路及び河川交通の修築、國家收入に關する範圍內に於て從屬的行政に於ける私人の專斷なる任意行動を抑制するにありと做せり。如上の改革を行はんか國運は急速なる進步を遂ぐ可く、Henri 四世の治下に在りて疲弊の極に達し、國債の重荷に苦められたる佛國は直ちに富裕充實の國土と爲りしにあらずや。一世紀以前には二千四百萬を有し、一千七百年には殆ど四十年間に亘る不斷の戰鬪並に Nantes 勅令廢止の後なりしにも拘らず猶ほ一千九百五十萬の人口を剩したり。然るに今日は僅に一千六百萬を有するに過ぎず。且つ其大部分は困窮の極に沈淪し居れり。夥多にして販賣すること能はざるは之を富と看做すこと能はざるが故に價格は決して低廉に過ぐ可らず、然も高直にして且つ窮乏の狀に在るものも亦不幸なり。夥多と正常且つ永續的なる中庸の價格を維持するこそ即ち富裕と稱す可きなれ。過剩穀物の輸出は這個中庸の價格を維持するに資する所ある可し。孰れにせよ目下の農業及び人口の非常なる衰壞に對して何等かの救濟策を講ぜざるを得ざるなりと說けり。彼は此書中に於て前記 Dangeul 並に Herbert の著 Sully, Colbert, Cantillon 及び Dupré de Saint Maun 並に Jean Baptiste Naveau の Financier Citoyen（一千七百五十七年巴里版兩卷）を引用せり。

Quesnay は以上三項の外 Hommes, Impôt 及び Intérêt de l'argent 等の三項を Encyclopédie に投じたるも、同全書は一千七百五十七年官命によりて禁止せられ是に秘密出版となりしを以て彼は之に關與するを中止せり。Hommes の手書は Stephan Bauer 博士により一千八百九十年巴里なる Bibliothèque Nationale に於て發見せ

られしが、其他は不幸にして悉く散逸せり。

三

Quesnay が最大なる著述は謂ふまでもなく Tableau Oeconomique. なり。此書を以て「特に政治社會に安定を與へたる天地開闢以來の三大發明の一」と做せる Philosophie Rurale に現れたる Marquis de Mirabeau の讃詞（一千七百六十三年版、同書第一卷十九頁）は一度 Adam Smith によりて其大著の第四編第七章に譯載せられてより洽く人口に膾炙するに至れり。

此書第一版の草稿は Marquis V. de Mirabeau の手書中に存在し、今巴里 Archives Nationales に所藏せらる。其複製は之を August Oncken の Geschichte der Nationalökonomie（三百二十四頁より五頁の間）に於て見るを得可し。第一版は一千七百五十八年十二月刊行せらる、今世に傳らず。一千七百五十九年の第二版は著者が其必要上僅かに三部を飜刻したるものにして其內の一部 Alfred Sterns の暗示に據り一千八百九十年 Stephan Bauer 之れを Archives Nationales に發見し、次で一千八百九十四年 British Economic Association の手に眞寫版に印刷せられて世上に流布するに至れり。一千七百六十年 Mirabeau 亦其著 L'ami des Hommes の第六卷に Tableau Oeconomique avec ses explications の題下に之を重刻し、更に一千七百六十三年には Philosophie Rurale に、一千七百六十七年には Elements de philosophie rurale 中に挿入し、一千七百六十六年六月には Quesnay 自ら Journal de l'agriculture, du commerce et des finances 誌上に Analyse du Tableau Economique を、一千七百六十五年十一月には Objections contre le Tableau économiqué を一千七百六十六年一月には Réponse aux objections を同誌上に發表せり。彼の Analyse du Tableau Economique は又一千七百六十七年十一月の Du Pont の Physiocratie（一千七百六十八年 Leyden 版）に表れ、其後 Abbé Baudeau の Éphénéndes du citoyen 誌上に於ける Exlipcotion du Tableau と爲り（一千七百六十七年）、著者の Maxires générales du gouvernement économique d'un royaume agricole に入り（一千七百七十五年）、更に Forbonnais, Linquet, Daire 及び Oncken の飜刻と爲りて現れたり。

「經濟表」は四つ折半一面に印刷せられ、表中生產的費用即ち農業等に關するもの Dépenses Propuctives relatives à l'Agriculture, &c. 所得の費用 Dépenses du Revenu 並に不生產的費用即ち工業等に關するもの Dépenses Steriles relatives à l'industrie, &c. の三項目を立て、農業に依りて英國に於けるが如く十割の純利潤 produit net を擧げ得可しとすれば、一年六百リーブルの資本投下 avances annuelles 並に原始の投資 avances primitives は或は徵稅權者の手に租稅として、或は地主の手に地代として歸す可き六百リーヴルを生產す、彼等は其一半を農產物に他の一半を不生產的費用に充つ。斯くて六百リーヴルは二流に分れに三百リーヴルは第一項目に、他の三百リーヴルは第三項目に入る。第一項目に入れる三百リーヴルは再び農業に充當せられて復た十割即ち三百リーヴルの所得を第二項目に送り、更に兩側に分流して百五十リーヴルは農業に投入せらるゝことゝ爲る。而して先に第二項目に入れる三百リーヴルは工業品、住居、衣類、金利、家內使用人、運輸費、外國品等と爲り再び年々二分せられて一は土地より生ずる原料品と爲り、他は不生產的に使用せらるゝに至ることを示せるなり。

「經濟表」は十二頁の說明を伴ふ、而して之に次いで、前者の如く交錯點綴せる線を有せざる一葉の表を以て再度之を明示し更に Extrait des Oeconomies Royales de M. de Sully と題する

總計二十三個の格言より成る四頁を附加せり。

説明書は説きて云ふ。一國の有效なる生産は第一項目の給養せらるゝ範圍に依頼するものなり。若し富の大部分が年々第三項目に吸收せられて第一項目に歸入することなからんか國民的配當は減殺せらるゝなり。然れば放恣なる虚飾的奢侈は頗る急速に富裕なる邦家を衰滅せしむるものなりと。而して前記の表中に示されたるが如く資本の使用其當を得ば、殆に又各地に於て耕作用に牛を廢して馬を使用するとせば、一國の資本に見積られたる富の總額は大凡五百九十億リーヴルに達するの計算と爲る可く、誤算の爲め二十分の一の増減ありと假定せば五百五十億乃至六百億リーヴルと爲る可し。遮莫そは下に掲ぐるが如き八大障害なきを條件とせるものなり。農業國民衰亡の主要原因たる八大障害とは、第一、課税の形態悪しく耕作者の資本を損傷すること、第二、徴税費の多額に失すること、第三、過度なる装飾上の奢侈、第四、訴訟費の過重なること、第五、原料品の輸出貿易缺欠せること、第六、原料品の國内交易及び耕作の自由缺欠せること、第七、地方人民の人格的困惱、及び第八、生産的費用の項目に年純益の回收缺欠せること是なりとす云々と。而して卷末に附せる Sully の Oeconomies royales よりの拔萃に假託せる格言は前に掲げたる「穀物」中に表れたるものを追加し修正せるものなり。

農業國衰亡の主要原因

四

彼は又「經濟表」と殆ど同時に Observations sur la psychologie, on science de l'ame の題下に前表と同一の形態を以て Versailles に於て動機の表を印行せり。其述作せられたるは一千七百五十八年なり。

彼が Maximes générales du gouvernement économique d'un royaume agricole は最も簡明に其主張を捕捉し得るの便宜あり。此書は一千七百六十三年 Mirabeau の Philosophie Rurale 中に出版せらる。全篇三十個の格言より成る。此格言は各斷片的なる章句にして、今其の主なるものを擧ぐれば。（第一格言）統治權をして單一ならしめ且つ洽く社會の各個人幷に私益を目的とするあらゆる不正企業の上に超越せしむ可し。即ち統治及び服從の趣旨は萬人及び萬般の正當なる利益の安固にあるを以てなり。統治權内に對抗的勢力を設くるの制度は徒らに强者の間に不和を生じ、弱者の壓迫を釀すが故に有害なり。（下略）。（第三格言）主權者並に國民をして常に土地は富の唯一の根源なり而して之を増加せしむるものは農業なりとの事實を忘却せしむ可からず。何となれば富の増加は人口の増殖を確保し、人民幷に富は農業を繁榮ならしめ商業を擴張し製造業を鼓舞し而して更に富を増加せしめ且つ之を永續せしむ可し。（第五格言）租税をして破壞的ならしむ可らず、即ち國民の總収入に對して不權衡のものたらしむ可らず。租税の増加は收入の増加に隨伴せしむ可し。租税は直接に土地財産の純收穫に基きて査定すべく人民の貨銀若くは生活資料に課税すべからず。期の如き課税法を行ふ時は徴收の費用を増加し商業に收りて有害となり、而して年々國富の一部を破壞する事となる可し。猶又租税は之を土地耕作者の富より徴收す可らず、即ち一王國内に於ける農業に投入したる資財は租税の收入及び市民各階級の生活資料の産出の爲めに愼重に保存せられざるを得ざる固定財産として尊重すべきものなればなり。然らざれば租税は頽廢して掠奪となり而して急速に邦家の荒廢を來すべき衰耗の因を爲すに至るべし。（第十五格言）穀物耕作に充用せられたる地所は出來得る限り之れを結合せしめて以て富裕なる農民によりて經營せらるゝ大農圃たらしむ可し、即ち建築物の保存及び修繕の爲めに失費を要すること遙に少

なく而して小農企業に比し大農企業は在りては比例的に遙に經費少なく、且つ純收益遙に大なるを以てなり。小農民の增加は人口に取りて有害なり。最も安固にして最も善く諸般の階級に人々を分つ諸般の勞働に使用し得可き人口は純收獲によりて支持せらるゝ所のものなり。動物、機械、河流、其他の手段によりて遂行し得可き勞働によりて純收獲を增加せんが爲めに行はれたるあらゆる節約は國家の人口に取り其利益と爲る可し、即ち純收獲にして彌々大ならんには他の勤務若しくは他の勞働に對し人々の受くる利得をして彌々大ならしむるを得可ければなり。（第十七格言）人々の勞働によりて生產せられたる物を販賣運輸するに當り其機會を容易ならしむるが爲めに道路の修築並に運河河海の航行を行はしむ可し。何となれば商業の失費にして節約せらるゝ所のもの彌々大ならば領內の收入は彌々增加すべければなり。（第二十格言）下層階級に屬する市民の幸福を減少せしむ可らず、然らば即ち彼等は僅に國內のみに於て消費せらるゝを得るが如き諸般の財の消費に關與すること能はざる可く、延いて國民の再生產並に收入を減少せしむるに至る可し。（第二十一格言）土地所有者並に營利的職業を有する諸般の人々をして無益の貯藏に耽らしむること勿れ、斯くの如きは即ち彼等の所得若くは利得の一部を流通及び分配場裡より排除するものなればなり。（第二十四格言）賣却せらるゝ商品と購入せらるゝ物とより生ずる利潤の大小を考查せずして單に貨幣額の平衡に由り判斷を下し以て外國との相互取引の表面に現はれたる利益によりて何人をも欺くこと勿れ。何となれば損失は屢々貨幣額を餘分に收受したる國民の側に存することある可く而して這般の損失は收入の分配並に再生產の不利を來すことあればなり。（第二十五格言）取引の完全なる自由を維持せしむ可し。

即ち國民及び國家に取り國內及び國際取引の最安固最確實且つ最有利なる支配は競爭の完全なる自由に存すればなり。（第二十七格言）政府をして徒に節約をのみ顧慮するとなく王國の繁榮に必要なる諸般の動作を取らしむべし。何となれば大失費と雖も富の增加によりて適當のものたらざるに至ることあり得可ければなり。然れども吾人は濫費を以て單なる失費と混同せざるを要す、即ち濫費は國民並に國王のあらゆる富を悉く減滅せしむるものなればなり。（第二十九格言）國民の繁榮に基き而して單に財政家の信用に基くに過ぎざるものを除きては何人も一國に取りて正當なる利益ある財源を望む可らず。何となれば金錢上の財產は國王をも國家をも認識せざる私の富なればなり。（第三十格言）國家をして政府公債を形成すべき借金を避けしむ可し。何となればそは國家に負はしむるに破產的債務を以てし而して流通證券の仲介に由りて商業又は貨幣交易を誘致し斯て流通證券の割引は彌々益々金錢上の財產の不生產性を增加すればなり。這般の財產は財政を農業より分離せしめ而して不動產の改良並に土地の耕作に必要なる富を村落地方より奪ひ去るに至る可し云々と。

五

Quesnay が一千七百六十五年及び六十六年九月 Journal de l'agriculture, du Commerce et des Finances に揭げたるものに Le Droit Naturel あり。此書に於て彼の學說の哲學的基礎を窺知す可し。彼曰く凡て人は自己若くは他人に毀害を加へざる範圍內に於て其能力を自由に活用し得可き天賦の權利を有するものなり。此自由に對する權利は其推論として財產に對する權利幷に之を擁護す可き國家の義務、換言すれば保安の義務を包含す。安固の保證は洵に國家唯一の職能にして之を擴張するは個人の自由を侵害するの虞ある可し。此目的の爲めには國家は强大

に過ぐることある可らず――憲法上の權力壓肘並に平衡は單に中央の權威を軟弱ならしむるものに過ぎず。國家の專制は單に自然法の違反ある毎に之に對して憤起し若しくは更に進んで之を不可能ならしむる明敏なる輿論によりてのみ調和せらる可きものなりと。曾て佛國第一皇子 Quesnay に向つて王者の職責を遂ぐるの困難を痛歎す。Quesnay 曰く「臣は然くその煩惱なる所以を見ず」。第一皇子問ふ「然らば卿にして若し王者たらば卿は何事をなす可きや」。答へて曰く「無」。更に問ふ「然らば統治するものは何物ぞ」。曰く「法則」と是實に彼の簡明なる答なりき。又或る時一廷臣僧侶と議會との紛爭に國王の倦み疲れたるを見て强壓的方策を提議して曰く、「王國を支配するものは斧戟あるのみ」と。Quesnay 問ふて曰く「而して請ふ、閣下よ、斧戟を支配するものは何者なりや」。彼の對手は沈默せざるを得ざりき。博識なる醫師は附言して曰く「そは輿論なり、かるが故に卿は輿論の上に卿の行動を始めざるを得ず」と。W. Hasbach 教授其著 Die allgemeinen philosophischen Grundlagen der von François Quesnay und Adam Smith begründeten politischen Oekonomie（一千八百九十年）に於て曰く Quesnay の經濟意見は Shaftesbury Locke 及び Cumberland 等英國學者より受けたる哲學上の演繹論に基礎を有すと。彼等と等しく彼は自然の法則に訴へたるも然も其先輩と異りて（自由貿易說を主張したる Grotius の例外を除きては）彼は宗教、政治並に個人生活以外に其範圍を擴張して經濟學に及ぼしたり。Locke を以て政治的個人主義の父とすれば Quesnay は當に經濟的個人主義の父の中に算ふべきものゝ一人なり、而して彼が眞の創意は其經濟生活の有機說に有り。彼の經濟上の原則は其哲學上に愼重に構成せられたりと云はんよりも寧ろ之によりて支持せられたりと主張し得可し。然れども Mercier de la Rivière 及び其他の力によりて Physiocratie は漸次哲學的成形を取るに至りしなり。

別に又此 Confucius d'Europe は Éphémérides 誌上に Despotisme de la Chine を載せ、更に Analyse du gouvernment des Incas de Peron を物せり。其他尙ほ多方面に於ける彼の博識を證するに足る述作頗る多し。

彼は路易十五世の崩御と共に朝廷の寵遇を失ひ、僅に Turgot の改革の端緒を見たるのみにして一千七百七十四年十二月十六日を以て Versailles に逝けり。一千六百九十四年六月四日 Montfort-l'Amaury 附近の Méré 村に生れ、淸廉なる法曹なりしも數奇なる運命に弄ばれて其子の敎育をも全く等閑視したる Nicholas Quesnay の十三兒中の第八子として、十餘歲に達するまで素讀をさへ心得ざりし彼が半身像の前に一千七百七十四年十二月二十日 Mirabeau 侯爵は凡そ此世にありとあらゆる讃詞を羅列して其追悼の演說を爲せり。彼は實に最初の經濟學派たる Physiocrates の偉大なる中心人物として其の學徒の渴仰の裡に靜かに永き眠に就けるなり。（大五、十二、十五）。